
定時制高校に対する地域臨床的支援の試み (その6)

Community Clinical Psychological Support of an Evening High School (VI)

清澤千絢 川田麻菜美 構 美穂 向阪俊佑
佐藤 葉 高橋圭佑 中田行重

関西大学臨床心理専門職大学院

Chihiro KIYOSAWA, Manami KAWATA, Miho KAMAE, Syunsuke KOUSAKA,
Shiori SATOU, Keisuke TAKAHASHI, Yukishige NAKATA
Graduate School of Professional Clinical Psychology, Kansai University

◆要約◆

ある定時制高校への大学院生による地域臨床的な支援活動は今年で6年目となった。今年度は、昨年度に引き続き「改訂版支援モデル（循環型）」に基づく活動を充実させ、生徒対応や教室内支援、グループワークの実施、先生方との共有ファイルによる情報共有、相談室通信の発行を行った。昨年度、先生方との連携強化が課題として挙げられていた。それを受け今年度は、教室内支援のメンバーを固定し、教科担当の先生との問題共有やニーズの把握をスムーズに行えるような体制を整えた。さらに、今年度は校内巡回を積極的に行い、支援活動を校内全体に拡大することでより多くの生徒と関係を築くことができた。これらの活動を通じて、支援メンバーからも生徒に関する情報を先生方へ積極的にフィードバックできるようになり、相互的な情報共有が可能となった。また、同校にて新しくNPO法人が「居場所づくり」の活動を開始するという環境の変化を、支援メンバー内での密な情報共有と、先生方との連携により乗り越えることができた。

キーワード：定時制高校、校内巡回、情報共有、連携

Abstract

It has been 6 years since a team of graduate students began offering psychology support to an evening high school. This article reports on the approach to enhance efforts and consider the challenges to the activities of the next fiscal year. This year, we continued to enhance the activities based on “the revised support model” (circulation type) from last year, supported students during class, produced a group project, shared information with teachers through shared files, and issued counseling room communications. Last year, enhancing cooperation with teachers was a problem. Therefore, each member was assigned to be in charge of a class this year, in order to share problems with subject teachers and to clearly understand their needs. In addition, an expansion of support to the whole school, such as visiting classrooms to talk with students, has allowed us to

form relationships with many students. Through these activities, because members were able to tell teachers information about more students, two-way communication was facilitated. Members were able to clear the hurdle of environmental change, which the NPO corporation started as “the making of a place to stay” because information sharing took place between members and members cooperated with teachers.

Key Words: evening, high school, share the information, cooperation, visiting classroom

はじめに

ある定時制高校における地域臨床的な支援活動も、筆者らで6年目を迎えた（中田・中村・日野ら 2011；倉石・横谷・梅井ら 2012；山見・細見・吉川ら 2013；井上・大川・澁川ら 2014；清水・妹尾・有福ら 2015）。これまで、定時制高校の支援要請に対して教員と大学院生によるチームを組み、主に大学院生がボランティアとして支援する試みを続けてきた。

これまでの活動を通し、井上・大川・渋川ら（2014）は「改訂版支援モデル」を提示した。改訂版支援モデルは、①浸透化②グループワーク（以下、GW）③相談活動④授業内支援⑤支援メンバー内の活動⑥先生との連携という6つの構成要素で成り立っている。①浸透化は、「非専門家である外部者（支援者）が、当事者の独自の文化に溶け込むための一連の日常的な働きかけ」（山見・細見・吉川ら 2013）と定義される概念である。①⑤⑥が支援の基盤であり、その基盤

の上に②③④という具体的な支援活動がある。翌年、清水・妹尾・有福ら（2015）は改訂版支援モデルの有効性を明らかにした。さらに①⑤⑥と②③④は相互に作用し合っており、両者を充実させることで良い循環が生まれることを示した（Figure 1 参照）。

以上より、筆者らにおいても「改訂版支援モデル（循環型）」（清水・妹尾・有福ら 2015）に基づき、活動を行うこととした。

本稿は、清水・妹尾・有福ら（2015）に引き継いで行った活動内容や、新たに力を入れた取り組みについて報告する。さらに、今年度よりNPO法人による生徒支援の取り組みも本高校で始まり、このような変化に対する筆者らの働きについても考察を加えることを目的とする。

活動

以下、筆者ら支援メンバーの活動を基本的な活動、校内巡回、教室内支援、GW、情報共有、

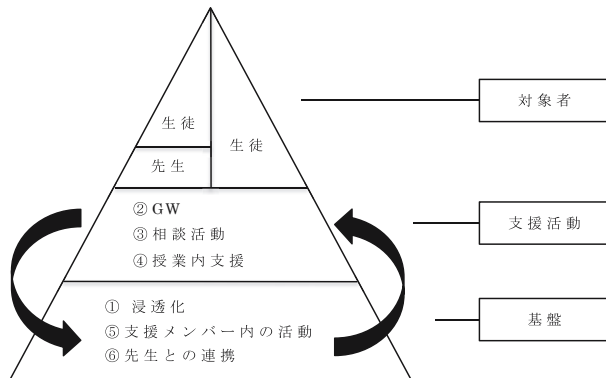


Figure 1. 改訂版支援モデル（循環型）

NPO 法人、その他の順で紹介する。尚、支援メンバーの発言を〈 〉、生徒の発言を『 』、強調部分を“ ”で示す。

1. 基本的な活動

支援メンバーの活動は、1年間を通して生徒が登校している期間の、月曜日と木曜日に行われている。6名の院生が3名ずつ各曜日に分かれ、給食の時間から3限の終了時刻（19：25～20：40）まで校内の一室を借りて“ほっとステーション”（以下、HS）という生徒支援室を開室している。また、来室する生徒の増加に伴いHS前の共有スペースであるコモンスペース（以下、CS）も使用している。

HSやCSでの活動は生徒の悩みや困りごとを聴く相談活動や、さまざまな話をして生徒と交流することによって関係を構築する機能を担っている。最初は自発的に来室する一部の生徒と

の交流に限られている面があったが、院生が積極的に話しかけたことや、時には先生からリファラーされたことによって来室する生徒が徐々に増加した。またHS以外での活動として校内巡回も行っている。生徒との関わりを広げるため、今年は特に校内巡回に力点を置くこととした。詳しくは後述する。

これらに加えて、支援メンバーは近年、文化祭等の学校行事にも参加している。ここでは特に生徒同士のつながりを観察し、たくさんの生徒と交流する機会となり、普段の活動では関わりの薄い生徒との交流にもつながったと思われる。以上の活動により本年度は昨年度に比べて生徒対応数が増加した。

以下に、教室内支援で関わった生徒数を除く昨年度と今年度の生徒対応数をTable1とTable2に示す。

Table1. 生徒対応数（昨年度）

	1年生	2年生	3年生	4年生	計
4月	20	5	2	3	30
5月	29	11	9	10	59
6月	24	11	8	19	62
7月	21	9	14	13	57
9月	20	10	13	13	56
10月	31	8	15	29	83
11月	28	9	17	19	73
12月	21	7	31	18	77
計	194	70	109	124	497

Table2. 生徒対応数（今年度）

	1年生	2年生	3年生	4年生	計
4月	9	11	13	26	59
5月	20	13	8	26	67
6月	30	29	8	26	93
7月	18	9	2	19	48
9月	16	20	10	27	73
10月	27	24	8	28	87
11月	31	28	14	30	103
12月	30	12	28	17	87
計	181	146	91	199	617

2. 校内巡回

昨年度はHSやCSでの活動のほか数名の支援メンバーが校内巡回を行い、教室で一人で過ごしている生徒や、HSに来室することがない生徒に対して声掛けを行うことで、新しい生徒とのつながりを持つことができた。また、HSの存在を広く校内全体に周知させ、HSへの来室者数を増加させるに至っている。今年度も昨年度と同様に校内巡回を行っている。しかし、

今年度は生徒とのつながりの拡大やHSの周知のみにとどまらず、教室内での生徒の様子や生徒同士のコミュニケーションを観察する等、積極的な関わりを持つことを心掛けた。このように、HSの機能を校内全体へ拡大させる形で活動を行うことにより、HSだけでなく学校全体に活動の幅を広げることができた。また、先生方から特定の生徒について校内巡回の中で支援を行ってほしいという依頼を受けるまでに至っ

ている。

3. 教室内支援

昨年度（清水・妹尾・有福ら 2015）は“授業内支援”として活動していた授業時間中の教室内での支援を、一昨年度（井上・大川・澁川ら 2014）同様“教室内支援”と呼ぶこととした。これは“授業内支援”という呼び名によって、活動の主旨が学習指導であると先生方に誤解を生むことを懸念したためである。支援メンバーの主旨はあくまで生徒の授業参加へのモチベーション向上であり、学習指導もその一端を担うものの全てではない。授業に集中しにくい生徒の注意を向けることや、解らない問題が出てきたときの対処法（先生に質問する、教科書で調べる等）を考える手助けをする等、授業へ参加しにくい生徒への全般的な支援を目的としている。今年度は、前期の支援開始前に教室内支援の主旨を改めて説明することで、先生方との認識の齟齬が生まれまいよう努めた。また、今年度は継続的な支援の必要性を感じ、教科ごとに支援メンバーを固定し、決まった授業に決まったメンバーが入ることとした。

昨年度同様、授業前に先生方と教室内でのニーズや支援メンバーの役割について話し合うことで、より生徒や先生の困り感に合わせた支援を行うことができた。その結果、先生方と支援メンバーが支援目的について共通認識を持つことができたため、授業へのモチベーションを維持しにくい生徒や注意を向けにくい生徒への支援といったニーズが先生方から寄せられるようになった。

4. グループワーク

2年目（倉石・横谷・梅井ら 2012）以降、支援活動の一環として毎年2回1年生を対象にGWを行っている。昨年度後期はGWを実施する目的として、先生方から就職に向けてのキャリア支援にもつながるようなワークを行ってほしいという意見があったため、産業領域でも行われ

ているようなワークを手掛かりにGWの計画を立てていた。しかし、昨年度末の支援会議では先生方からもっと心理の専門性を活かしたワークを行っても構わないという意見が多く寄せられ、先生方と支援メンバー側でGWへの認識の違いがあったことが明らかになった。そのため今年度は昨年度までと違い、キャリア支援にとらわれずコミュニケーションをテーマにしたワークを実施することとなった。実施時期は昨年度と同様、前期（6月）と後期（2月）に1回ずつの実施であり、後期のGWに関しては本論文の提出期日時点では実施されていない。よって本論文では主に前期のGWについて詳細を述べる。

前期のGWでは、1年生（2クラス）を対象にそれぞれの教室で絵を描く作業を通してコミュニケーションの在り方について考えるという、対人援助職を対象にしたGWなどでよく行われているワークを行った。手続きとしては、2人1組のペアを作り、一方が《お客さん》となり色鉛筆で描かれた絵を渡される。もう一方は《絵描きさん》となり《お客さん》が絵の依頼をしてきたという設定で、実際の絵を見ずに《お客さん》の話す絵の特徴を手掛かりに絵を画用紙に描いていく。絵を描き終わった後にペアで話し合う時間を設け、ワークの内容を振り返ってもらうようにした。なお、生徒に安心してGWに参加してもらうために、このワークは絵の上手下手を評価するものではなく、コミュニケーションの取り方を考えてほしいと伝えた。そして話し合いでは相手を責めないことというルールを設けた。さらに、昨年度の課題であった生徒の取り組みやすさに焦点を当てた工夫として、見本となる絵の作成を慎重に行った。見本となる絵は、生徒に侵襲性を感じさせることや、絵の上手下手に意識が向くことを防ぐために、風景を題材にした素朴な絵を支援メンバーが作成したものを用いた。

このワークは、(1)言葉は同じでもその受け取り方は人それぞれ異なること（当たり前だと思

っていることは他者にとって必ずしも当たり前というものではないこと)、(2)コミュニケーションを成り立たせているものは言葉だけでなく、常に様々なツール（ジェスチャー等）を用いて行われていることに気づくこと、(3)以上の(1)(2)を踏まえてディスコミュニケーションを防ぐ方法を考えるきっかけ作りをすることを目的に行った。この目的を簡潔に明記した模造紙を作成し、ワークの最後にその模造紙を見せながら説明をした。

GW 終了後は、先生方と生徒用に2種類のフィードバック（以下、FB）を作成した。先生方へのFBにはGW 実施によって生徒が感じたことや生徒の発言の他に、GW 中に支援メンバーが気づいた各生徒の特長を明記し、生徒へのFBにはGW 中の生徒の良かった点を口語的に明記した。

5. 情報共有

学校との情報共有

支援メンバーは毎回の活動終了後、その日に関わった生徒の様子等を所定の用紙に記入し、学年ごとにファイル化している。生徒に関するさまざまな情報を先生方と共有するためである。共有ファイルは教員室に保管されている。清水・妹尾・有福ら（2015）は、先生方との連携強化を今後の課題として挙げ、先生方と直接的に情報を共有することの重要性を述べている。そこで、今年度は活動の中で気になった生徒に関して、活動開始前後に支援メンバーから積極的に、先生方と情報共有をすることを心がけた。以上により、先生方のニーズを把握し共通認識を持つことができ、ニーズに沿った生徒対応をすることが可能となった。

そして、今年度は前期の活動を報告する場として、10月に会議の機会を設けていただいた。会議では、前期の活動報告に加え、活動の中で気になった生徒に関する詳しい情報や先生方の要望も直接お伺いすることができた。

支援メンバー内の情報共有

昨年度までと同様に、活動内容に関する記録を個人情報に留意した形で保管し、活動内容や生徒の様子等の情報を支援メンバー内で共有している。また、重要な共有事項に関しては、必要に応じて支援メンバーでミーティングを行い、全員が情報を把握することで一貫性と連続性を持った活動を行っている。

6. NPO 法人

今年度より、臨床心理士等も在籍するNPO法人が、同校にて新たに活動を開始した。生徒の生活設計も含めた、外部機関との連携や家庭訪問やアウトリーチ等のソーシャルワークのために高校が導入したものである。しかし、1年目の今年度は活動日を毎週水曜日とし、HSと同じ場所を拠点として“居場所づくり”の活動を行うことになった。名称も“ほっとステーション”と同様であるが、これは、生徒が新たな活動に対して馴染みやすいようにするためという先生方の配慮によるものである。先生方のNPO法人に対するニーズは筆者ら支援メンバーに求められている、生徒のメンタルケアというニーズとは明確に区別されている。しかし当初は、NPO法人との役割の違いについて先生方と支援メンバーとの間で十分に共有出来ておらず、筆者らはNPO法人と併存することに不安を感じていた。そのため、活動方針を再確認することを目的に、支援メンバー同士の話し合いの場も積極的に設けた。

7. その他

支援メンバーおよびその活動の浸透化を目的に広報活動を行った。最初の広報活動は始業式での挨拶であった。一昨年度より、始業式において生徒に対して年度始めの挨拶をする機会をいただいております。今年度も新入生を含めた全校生徒に向けて、HSの開室日時、活動内容の説明や支援メンバーの紹介を行った。さらに、一昨年度より引き続き、4月中にHSの活動内容

を記載したチラシを作成し、先生方を通して生徒に配布した。

継続的な広報活動としては、“ほっとステーション通信”（以下、HS通信）を1年間に6回発行することとした。HS通信とは、清水・妹尾・有福ら（2015）から開始された相談室通信のことであり、季節の話題や学校行事に沿った内容を中心に作成した。また、支援メンバーの認知と定着を目指し、顔写真を掲載した。HS通信は先生方を通して生徒に1枚ずつ配布し、HSにも掲示した。

考 察

1. 基本的な活動

支援メンバーの活動の軸はHSやCSでの相談活動である。改定版支援モデル（循環型）における相談活動は生徒への支援メンバーの周知に基づいて成り立っている活動である（清水・妹尾・有福ら 2015）。よって、活動開始時は活動全体を通してHSや支援メンバーの周知を心がけて活動を行った。

HSへ継続して毎回来室する生徒は多く、これらの生徒にとっては、HSは息抜きや話し相手と交流する場となっていることがうかがえる。日々の出来事やたわいもない話を共有できる場としてHSが機能していると考えられる。一方で、HSが相談の場として利用されることも多く、その際は安心して話せるように支援メンバーと生徒が対一になれる空間を作る配慮をした。このように臨機応変に対応することで、安心できる居場所を求める気持ちと、悩みを聞いてくれる存在を求める気持ちという2つのニーズ（清水・妹尾・有福ら 2015）に合った相談活動を行うことができた。

また来室する生徒の増加や、先生方からのリファールによって相談活動はHSだけにとどまらず、以下に記述する校内巡回が新たにHSの機能を果たす活動となった。HSの機能が拡大していくことで学校全体に活動が広がり、より多

くのニーズに応えることが可能となった。

2. 校内巡回

今年度の活動では昨年度と比べて積極的な校内巡回を行い、HSの周知にとどまらない活動を行ってきた。これにより支援メンバーは学校のどこにいても生徒との関わりを持つことができるようになり、生徒がHSだけでなく、学校全体を居場所として認識するようになったと考えられる。また、積極的に校内巡回を行うことが、HSで話をしたいと思っているものの、なかなか来室することができないでいる生徒に対しても支援の手を差し伸べることにつながった。このように校内巡回はHSの周知としてだけではなく、相談活動としての機能を強めたといえるのではないだろうか。

先生方から校内巡回において支援をしてほしいという依頼があったということから、積極的な校内巡回は生徒に対しての支援につながっているということが、先生方にも理解が得られていると考えられる。生徒だけでなく先生方もHSの相談活動としての機能を理解し、活用するようになった。このことは支援メンバーが自由度の高い支援を行うことを認められているという感覚につながり、相談活動としての校内巡回の機能が活性化されたと考えられる。

以上のように、今年度の活動により様々な形で校内巡回における相談活動としての側面が強調されることとなり、結果的にHSの機能が校内全体に拡大されることとなった。今後も継続して積極的な校内巡回を行うことによって、校内全体にまで拡大されたHSの機能を定着させ、巡回中の短い時間の中でも、より質の高い支援を展開できるようになることが期待される。

3. 教室内支援

生徒との関係性の構築について

教室内支援のメンバーを教科ごとに固定することによって、HSへ積極的に来室しない生徒からも『いつも授業に来ている人』として支

援メンバーの顔を覚えてもらうことができ、関係を作りやすくなった。また、昨年度との大きな違いとして、教室での授業だけでなく、体育にも参加したことが挙げられる。生徒同士の声かけやチームプレーの様子等、教室内での授業では見えなかった生徒間のコミュニケーションの様子を見ることができた。体育は教室での授業に比べて自由度が高いため、生徒側からも支援メンバーへ話しかけやすく、より相互的な交流のきっかけとなったと考えられる。

先生方との関係の構築について

授業ごとに支援メンバーを固定することによって、縦断的な生徒の変化が見やすくなった。そのため教科担当の先生との問題共有がスムーズになり、先生方からのニーズを把握しやすくなった。問題やニーズが焦点化されたことによって、〈先週より集中できていましたね〉等という生徒の変化や支援メンバーの考えを先生方へフィードバックすることができた。先生方からのニーズを伺うことが中心だった昨年度に比べ、支援メンバー側からも積極的に先生方とコミュニケーションを図りやすくなったことも大きな変化と言えるだろう。

4. グループワーク

GW 中には、生徒から『難しいなあ』という声も聞かれたが、興味をもって取り組んでいる様子が見られた。具体的には、絵を描くことが苦手な生徒に対して根気強く優しく指示をしている生徒もいた。また、見本どおりの絵が完成しなかったとしても、話し合いの段階ではわかりやすかった説明を伝え合い、ペアの生徒を励ます様子も見られた。さらに、普段から仲の良い生徒同士でペアを組むという手続きは取らなかったため、交流する機会の少ない生徒同士のペアができることもあった。その中で、相手のことを知るきっかけになったという生徒もいた。GW 終了後には『自分の思っていることを人に伝えるのって難しいな』『自分がこれしかないやろ

って思ってたことも相手には違ってた』等と語る生徒もいるなど、本GWの目的を生徒も理解していたと感じられた。また、難しさだけでなく『楽しかった』と感想を述べる生徒も多く、楽しみながらコミュニケーションについて改めて考え直すきっかけが提供できたのではないだろうか。

入学したばかりの1年生に対し、HSの取り組みを周知できることもGWの利点である。学校生活に対して様々な不安を抱く新生入生は多く、そういった生徒にHSを活用してもらうきっかけや、校内巡回でも『GWで来た人や』と生徒と支援メンバーの関係づくりのきっかけになった。

後期のGWについては、前期のGWを発展させた形として、2クラスの生徒を1つの教室に集め、3人1組のグループで1つの絵を完成させるというワークを計画している。生徒は前期のGWで、言葉で齟齬なく要望を伝えることや相手の言葉の意味を汲み取りそれを形にすることの難しさを経験した。この経験を踏まえ、後期のGWでは自分と他者の理解をどのように尊重させていくかという目的のワークに取り組む予定である。

5. 情報共有について

昨年度から共有ファイルは、それぞれの学年の教員室に分けて保管している。これにより、先生方からコメントを戴くことができ、普段の生徒の様子に加え生活背景も共有することができた。また、今年度は共有ファイルの内容に関して、先生方と直接話し合う機会も増え、時には特定の生徒の様子を見てほしいと依頼される等、積極的に情報共有をすることが先生方との連携強化につながっていると考えられる。加えて、そういった先生方との話し合いの内容やニーズを支援メンバー内で共有することで、一貫性と連続性を持った迅速な対応ができるようになった。このように、連携を強化することが、より質の高い活動への一助となることが示唆さ

れた。

6. NPO 法人に関して

NPO 法人が同校にて“居場所づくり”の活動を開始したことにより、支援メンバーが従来の活動方針のまま活動することに意義があるのかという迷いが生じた。また、当初は NPO 法人と我々に対する学校側のニーズが異なることを把握していなかった。これをきっかけに、支援メンバー同士で話し合う機会を設け、活動方針を再確認することができた。そして、NPO 法人と我々のニーズの違いを先生方と共有したことにより迷いは解消された。このように、NPO 法人の参入という大きな環境の変化を、支援メンバー同士の協力や先生方との話し合いによって乗り越えることができた。

今後の課題

今年度は、先生方と直接情報共有することや、共有ファイルによって昨年度の課題であった先生方との連携強化を試みてきた。しかし、先生方は多忙であり、共有ファイルへのコメントを載っているのは、一部の先生方のみであるという現状は依然としてある。今後は、先生方全体と情報共有できるように、共有ファイルの存在を周知させ、活用の仕方を考えていくことが課題である。

また、HS 前期総括会議においても、気になっている生徒の情報や学校側のニーズを直接伺えたことは、先生方との連携強化につながったと考えられる。しかし、どの程度の情報を教えていただくかについては、慎重に検討していく必要がある。

そして、今年度は、NPO 法人が活動を開始した初年度ということもあり、NPO 法人と支援メンバーが連携しながら活動する段階には至っていない。今後は、環境の変化をどう乗り越えていくか、そして NPO 法人とどう併存していくかが課題となると考えられる。

謝 辞

今年度も貴重な学びの機会を与えてくださった定時制高校の皆様方に、心より感謝いたします。今後とも尽力して参りますので、よろしくお願い申し上げます。

文 献

- 井上奈々・大川慧・澁川沙由理・中西達也・西中さおり・矢野礼花・清水達哉・妹尾美鈴・中田行重 (2014)：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み (その4) —改訂版支援モデルの提示—『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』4：11-20.
- 倉石百合子・横谷幸美・梅井茜・高石唯・船曳奈央・仲条淳博・津田政志・中田行重 (2012)：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み (その2)『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』2：71-78.
- 中田行重・中村絢・日野唯花・丹羽由子・福山侑希・菅野百合子・横谷幸美 (2011)：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』1：23-31.
- 清水達哉・妹尾美鈴・有福和・羽田野瑛子・宮地佑香子・結城進矢・向坂俊佑・佐藤栞・中田行重 (2015)：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み (その5)『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』5：109-117.
- 山見有美・細見知加・吉川真衣・西中さおり・仲条淳博・津田政志・中島妃佳里・井上菜々・中田行重 (2013)：定時制高校に対する地域臨床的支援の試み (その3)『サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要』3：79-87.